ーーーー別部屋ーーーー

0_zero

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ーーーー別部屋ーーーー

【Ｎコード】
Ｎ０３７９Ｖ

【作者名】
０＿ｚｅｒｏ

【あらすじ】
斉藤晶（さいとうあきら）は、母親・父親を亡くした・・・。
自殺・・・？そんなものでは・・・ない。・・・僕が殺してしまったんだ。
この事件がきっかけで、僕は「別部屋」というところに監禁されることとなる・・・。
「別部屋」には僕と同じ罪を犯してしまった人が、何人も集まっている。・・・・ただし！みんな一人一人、別々の部屋に監禁されている・・・。

部屋は全部で・・・６部屋、　ということは・・・６人の人が監禁されているはずだが・・・。

プロローグ

ある日の事件がきっかけで、別部屋に監禁されることになった・・・
斉藤晶（さいとうあきら）
その部屋の壁には大きく・・・　１週間生き延びろ、　という文字が赤いインクで書き示されていた。
この　「　別部屋　」　に居なくちゃいけない意味とは・・・そして、１週間生き延びろ　というのはいったいどうゆう意味なのか・・・。
別部屋から、だんだんと殺られていく人達・・・。
別部屋にいる人を殺ったのは誰なのか・・・そしてなぜ殺ったのか・・・。

全ては・・・この　「　別部屋　」　を読めばわかる・・・。

1日目

・・・目が覚めた。

周りに写った光景は・・・

（部屋・・・か・・・・・。）

ここは確かに　部屋　だった。

部屋といっても、タンス、椅子、机、テレビ・・・などは置かれていない・・・。

（何のための部屋なんだ・・・・。）

そう心に悟ってから、あたりを見回した・・・。

しばらく　部屋　を見回しながら歩いていると、壁に書かれた大きな文字が目に入った・・・。

ーーーー1週間、生き延びろーーーー

「なんだよ・・・これ・・・・。」

文字をよく見ると・・・赤いインクか何かで書かれていることがわかった・・・。

恐る恐る・・・文字に触れてみると。

「ーーーーーー！？」

・・・・・・・・・　血、だった。

それは、まぎれもなく・・・　血、　だった。

「な・・・なんなんだよ、此処！？」

晶(あきら)は、慌てて此処から逃れようと外につながるドアを開けた・・・。

外には、ビル、家、車、道路・・・などは、無かった・・・。

・・・・・海だった。

ただの、海ではない・・・赤くて・・・異臭の漂う、海だ。

もちろん、海も・・・赤いインクが入ったバケツを放り投げて赤くなったのでは、ないだろう・・・。

これも、確実に・・・　血だ。

まず、異臭のひどいインクなんて・・・この小さな世界には、存在しないだろう。

なに？一面が海だって？・・・そうだ、一面が　暗赤　の海だ。

・・・・今、気付いた・・・隣に２つの扉があった。

晶が監禁されることとなった部屋も合わせると、計３つの部屋があるということだ・・・。

晶は、少しでも多くの人がいたほうが安全と判断して・・・すぐに隣の扉を開けた・・・。

・・・・やはり、何もない　部屋　だった・・・前には、体育座りをした・・・少年？

「ね、ねー生きてますかぁ～」

「・・・・・・・。」

少年は、無言だった・・・。

「おい！聞いてんのか」

と、強がりながら少年の近くに行き胸元をつかみ上げると・・・。

「ーーーーーーーーーー！？」

少年では、なかった・・・。

・・・・・・・・・・・・死体だ。

「う、うわっ！」

とっさにその子を離した・・・。

バタンッッ。

倒れこんだ男の子の顔は、目は白目、舌だらり、腹からは臓器らし

きものが、とびだしていた・・・。

「おえぇぇぇぇぇぇッッ」

その場で、晶は吐いてしまった・・・。

「・・・はぁはぁ、なんでこんな残酷な殺し方したんだよ・・・まだ、青年でもないのに・・なんで」

男の子を見たら、迅速で僕の頭の中に・・・母親、父親の顔が浮かび上がった・・・。

そして、迅速で頭の中が整理されていく・・・。

「・・・・俺が・・・殺ったんだ・・・俺が、母さんと・・・父さんを・・・うわぁぁぁぁぁぁ！」

晶は、・・・・・・泣いた。

「俺が・・・俺が母さんと、父さんを・・・殺したんだ・・・なんで・・・なんでなんだよ！くそぉ」

刹那！

キィィィッッ

「ーーーー！？」

扉が、開いた・・・。

・・・・・・・・人が立っていた。

「・・・・誰だ！？」

「・・・・・・・。」

無言だった・・・・。

「くそぉー・・・・また、死んでるのかよぉ・・・・頼むから返事してくれよぉ・・・・。」

「・・・・・・泣いてるのか・・・・君？」

「ーーーー！？」

返事が返ってきた・・・・。

「な、泣いてなんかいねぇよ・・・・それより、貴方は？」

「あ！俺か？俺は、　滝上志春（たきじょうしはる）、１つ下に住んでる」

「下！？下は　赤い海じゃないのか！？」

「おいおい・・・・ここにはな～上に３つの部屋、下に３つの部屋、総計６つの部屋があるんだぞ」

晶は、細かく見回してはいなかった・・・・　暗赤の海に気をとられて下の部屋など数えてはいなかったのだ・・・・。

「ま、まぢですか！・・・・ってことは、計６・・・・５人の人が住ん

でるってことか」

「あぁ、　残り　５人だ・・・・。」

「・・・・残りって、俺らも殺されるのか！？」

「おそらくな・・・・。」

「ってことは、この　６つの部屋のどこかに・・・殺人鬼が居るってことか！？」

「殺人鬼かは、知らないがな・・・・。」

志春(しはる)が言うには、この　６つの部屋のどこかに殺人鬼が潜んでいるらしい・・・・。

だが・・・殺し方が普通の人が殺すような殺り方ではないらしい・・・。

どこか病んでるかのように、臓器をむき出しにして・・・酷いときには、内臓を　喰う　らしい。

「それより、何で志春はそんなことを知ってるんだ・・・・？」

「聞いたんだよ・・・・。」

「誰から・・・・？」

「・・・・・。」

「・・・・・志春？」

「そいつから聞いたんだよ・・・。」

「・・・・！？」

「そいつって・・・この少年のことか・・・？」

「・・・・・・あぁ」

「・・・・・何でこの子は、そんなことを知ってたんだろう・・・？」

「そこまでは・・・・知らない。」

「・・・・とにかく、まずは人集めだ・・・一緒に来てくれる？」

「あぁ、わかっぜ相棒！」

「相棒って・・・そういえばまだ俺の自己紹介してなかったな・・・。」

「あぁ、そうだったな」

「俺は、　斉藤晶（さいとうあきら）・・・中学2年生だ。」

「おぉ、中2か！俺より2つ下か・・・。」

「ってことは、貴方は・・・高1！？」

「そいことになるな・・・大丈夫、年上だからって気取ったりしないよ・・・。」

「・・・おう！信じてるぞ！」

「オーケー相棒さんよ！」

二人は、人集めをするために外に出た・・・。

「・・・思えばもう夜か・・・。」

「・・・早いもんだな・・・。」

「ここには、時計というものもきっと無いんだろうな・・・。」

「あぁ、無いさ・・・。」

しばらくの間、上3つの部屋の通り道を歩き回っていると・・・強い眠気に誘われた・・・。

「・・・やばい、志春・・・すげー眠くなってきた・・・。」

「・・・じゃ、もう部屋に戻るか・・・。」

「あぁ、そうだな・・・あ！でも下に殺人鬼が潜んでるかもしれないから・・・気をつけろよ」

「言われなくっても、わかってるよ・・・晶」

「そっか、じゃ・・・またな・・・。」

「おう、おやすみ・・・。」

そう言って、２人は自分の部屋に向かって歩いていった・・・。

１日目・・・死亡者　少年　出会った仲間・・・滝上志春　残り５名

1日目（後書き）

コメント待ってます・・・。

2日目（前書き）

1日目で見つけた・・・死体が・・・。

2日目

・・・・・・・・・・・・・・・。

（父・・・さん・・・・？）

（久しぶりだな・・・晶・・・・。）

（なんで？なんで、父さんが・・・だって父さんは・・・）

（・・・・。）

（・・・・死んだのに・・・・。）

（・・・あぁ・・・死んださ　ーーーーーーー、　オマエに殺されてな！！）

（ーーーー！？）

（晶、なんで父さんを殺したんだ！？・・・まさか、意味もなく・・・じゃあないだろうな・・・？）

（違うんだ！！、俺は・・・俺は・・・・。）

（・・・・・・俺は、なんだぁぁ？）

（ーーーー！？）

（なんで、そんな刃物みたいな物・・・持ってるの・・・・。）

（あぁ、これか？これわぁ～、オマエを殺すためだよぉぉ！！）

（・・・やだ、やだよ・・・父さん・・・）

（・・・・もう、遅い・・・・よ。）

（うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ）

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ーーーー！？」

「・・・あれ？今のは・・・・。」

「・・・大丈夫か？晶・・・・。」

「・・・志春！？」

「お前、きっと酷い夢見てたんだろう・・・・。」

「・・・さっきのは、夢　か・・・・。」

「どんな夢見たんだ・・・？」

「父さん・・・の、　夢　。」

「・・・きつかったろ・・・・。」

晶は、無言で答えなかった・・・・。

きっと、怖かったのだろう・・・。

「・・・あ！そういえば」

「どした？志春」

「晶の隣の部屋に居た・・・少年、ーーーー　消えた　。」

「ーーーー！？」

「・・・血、1滴すら見当たらなかった・・・。」

「どうゆうことだよ・・・。」

「・・・・要するに、少年が　生き返った、　とゆうことだ・・・。」

「・・・そんな、だって少年は・・・昨日　死体で・・・。」

「・・・生き返った　と聞くと普通の人間に戻った・・・と勘違いするかもしれない・・・。」

「どうゆうことだよ・・・普通の人間じゃないのかよ・・・！」

「・・・　死んだ状態　の体で動いている・・・。」

「な・・・！？」

「・・・それに、　少年にもちゃんとした名前があった・・・。」

「・・・名前は・・・・？」

「・・・・・。」

志春は、下を向いて・・・・無言だった。

「・・・志春？」

「・・・・・・・・裕也・・・・。」

「・・・・・え！？」

「滝上・・・・裕・・・・也・・・・。」

「・・・・！？」

「・・・・・。」

「裕也（ゆうや）って・・・・滝上裕也って・・・・志春の・・・・。」

「・・・あぁ、ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー　弟だ）

「ーーーーー！！」

そう・・・・滝上裕也（たきじょうゆうや）とは、滝上志春（たきじょうしはる）の　弟　だったのだ。

「裕也・・・・ごめんなぁ、助けてあげられなくて・・・・バカだなぁ・・・・俺。」

床に　ポツンッ　と1粒の　涙　が落ちた・・・・。

「・・・志春・・・・。」

「・・・くそぉ！！・・・・くそぉ・・・・。」

刹那！！

きゃぁあぁぁ――――。

女の子の悲鳴が、1番　端の部屋から聞こえてきた・・・・。

晶と志春は、1番右側の部屋にいたので・・・その左が、　裕也・・・そして、最後が・・・女の子？

晶と志春は、すぐさま悲鳴が聞こえた　部屋　に向かった・・・・。

キィィィィ

扉を開けた・・・・。

その　部屋　に居たのは・・・少女？

「大丈夫か！？」

晶は、すぐに少女に近づいた・・・・。

少女は泣いていた・・・・。

「どうしたんだ！？」

「・・・死、死体が・・・ぁぁぁぁぁぁ・・・！！　後ろ・・・。」

「後ろ・・・？」

背後には・・・・・・。

「・・・・裕也・・・。」

「・・・あの時の死体・・・。」

そう・・・背後にいたのは、晶の隣に住んでいた・・・裕也　だった。

目は、白目　舌だらり　腹からは臓器らしきものがむきだしの状態で、立っていた・・・。

＜おナガヘッダァぁぁぁぁ・・・食べるゥゥゥぅゥ・・・。＞

裕也は、左手を・・・自分の　腹の中に突きこみ・・・骨、らしきものを取り出した・・・。

「ーーーーー！！」

裕也は、左手で持っている　骨らしきものを右手で掴み、両方でバキッと折り始めた・・・。

「・・・おいおい志春、こいつ・・・本当にお前の　弟　か・・・？」

「・・・そうだけど・・・今回の相手は、　　敵　と充たす・・・。」

志春は、　弟を　敵と充たした・・・。

＜ゴロズゥゥ　タベル・・・あは＞

俺らの隙をみて、少女を掴みはじめた・・・。

「しまった！！」

晶は、急いで少女に向かって走った・・・。

「離せぇぇぇぇぇ　化物がぁぁぁぁああぁ！！！！！！」

晶は、落ちていた　金属の棒　みたい物を右手に掴み・・・化物の腹に突き刺した・・・。

　　　ビチャアア・・・

・・・赤い　血が噴きだした。

＜ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！＞

「ごめんな・・・裕也・・・。」

そう晶は言い・・・鉄の棒を腹に刺したまま　志春に向かって・・・。

「おい、志春！！・・・ここは、　　自分の意思で・・・貫け・・・。

」

「・・・わかった。」

志春は、弟である・・・裕也の近くに行き・・・鉄の棒を握り・・・。

「お前は、俺の育てた・・・　最高の弟　滝上裕也ではない！！！！」

ブシャァァ・・・。

志春は、　化物　の体を真っ二つに切り裂いた・・・。

「終わったな・・・。」

「・・・・あぁ」

2人揃ってしりもちを着いた・・・。

「そういえば・・・何か忘れてないか・・・。」

「・・・・あぁ、忘れてるような・・・。」

2人は同時に後ろを振り向いた・・・。

・・・・・少女がこちらを見ていた。

「・・・・・・。」

「・・・・・・。」

「・・・・あの」

少女は、おびえながら立ち上がり・・・。

「あ、ありがとうございました！！！！」

頭をさげて・・・礼を言った。

「いいよ、このくらい」

晶と志春も立ち上がった・・・。

「そういえば・・・名前、聞いてなかった・・・。」

「あ！はい、私は　東条姫香（とうじょうひめか）、中学1年です。」

「じゃ、俺らも自己紹介するか・・・。」

2人は顔を合わせて、うなずいた・・・。

「俺は、滝上志春（たきじょうしはる）、高1だ・・・よろしくな。」

「よろしくお願いします」

「そして俺が、斉藤晶（さいとうあきら）、中2だ・・・よろしく」

「はい！よろしくお願いします」

（この子、中々・・・好みかも・・・。）

「あ～きら」

「ーーーーん！？な、なに？」

「今、この子について何か考えてたでしょ～」

「い、いやぁ～べ、別にぃ～考えてなんかないよぉ～」

「ふ～ん、そっか」

（ふぅ～助かった・・・志春結構・・・敏感だな。）

「あの～」

「ん！？どした？」

「私、　部屋に戻っていいですか？」

「あ！あぁ、いいよ」

「そ、それでは・・・また明日・・・おやすみなさい」

「あぁ、おやすみ」

姫香（ひめか）は、ドアをあけて部屋に戻って行った・・・。

「じゃ、俺らも・・・戻るか」

「そうだな・・・。」

晶と志春も　別々の部屋に向かって・・・歩き出した。

「じゃな、志春」

「おぉ、おやすみ」

晶は、部屋に戻ると・・・床に寝そべり・・・。

（あの姫香って子・・・身長が１４５ぐらいで、スタイル抜群　髪はツインかぁ～・・・いいな。）

今日の、１日は　晶にとって大変な１日でもあり・・・女神に出会った１日でもあった。

（　　おやすみなさい・・・みなさん　　）

２日目・・・死亡者　滝上裕也　出会った仲間・・・東条姫香　残り５名

2日目（後書き）

3日目を楽しみにぃ～。

3日目

・・・目が覚めた。

俺の顔を覗きこんでいたのは・・・姫香(ひめか)？

「晶くん・・・朝、だよ・・・。」

「ーーーー！？」

これは夢だと判断して、もう一度目を瞑った・・・。

「え！？ひどいです晶くん・・・私を見て目を瞑るなんて・・・グスッ。」

（ん！？今の　グスッ　て姫香のやつ泣いてんのか・・・。）

目をゆっくりと明けた・・・。

「うわーーーーーーーーーーん」

「おい！？まさか本当に泣いてるとは・・・わ、悪かった、もう泣かないでくれ。」

「・・・グスッ」

（いや～やっぱり泣き顔も可愛かったな～・・・って！俺なに考えてんだ！！）

「・・・あの」

「・・・・。」

俺は、正気に戻ろうとしていたので姫香の声は聞こえてはなかった・・・。

「・・・・。」

「・・・あの！！！！」

「はい！！」

「・・・・。」

「・・・なんだよ・・・・。」

「き、昨日は・・・本当に、ありがとうございました！！」

ペコッと姫香は頭を深くさげた・・・。

「あぁ、いいよ別に・・・あと、あの化物　殺ったの俺だけじゃないし・・・・。」

「そうですね・・・志春さんも、勇気を出してあの　化物（おとうと）を殺ったんですもんね。」

「・・・あぁ、どちらかというと・・・俺より志春のほうが辛かったはずだ・・・・。」

（よくやったな・・・志春）

俺は心の中から尊敬した・・・。

「ーーーーお～い、晶」

「ーーーー、志春！？」

「なんだよ、その　志春！？って・・・はい俺は滝上志春ですよ」

志春は、ドアに寄りかかっていた・・・。

「晶・・・さっきまでの話・・・全部聞かせてもらったよ。」

「あ、あぁ・・・。」

「・・・俺は、勇気なんて振り絞ってあの　化物　を倒してなんかねーよ」

「え！？」

「・・・あいつは、俺の弟じゃない！！・・・　化物　だ！！」

「・・・あぁ、志春の言うとおりだ・・・ごめん。」

「・・・誤らなくてもいいよ。」

「・・・。」

「・・・裕也は今頃、あの青い空の向こうに・・・みんなと仲良く

元気に暮らしているはずだ・・・。」

志春は、ドアから離れ外に出て青い空を見て・・・手を突き上げた・・・。

「裕也・・・元気でな・・・。」

刹那！！

「ん・・・！？空が急に赤く・・・ッッッ！！」

「おい！志春どうした？」

志春は空を見てから急に・・・倒れた。

「おい！志春！しっかりしろ！！」

「志春くん！しっかりして！！」

（くそー、なんで志春は急に・・・。）

そう考えていると・・・。

「晶くん！！空見て！！」

「空・・・？」

フッと空を見上げると・・・。

「ーーーー、んなっ！？」

空は・・・空ではなかった。ーーーー、　眼　だった。
あきらかに、赤くて不気味な　眼　だった。
「まさか！？志春はあれを見て・・・。」
刹那！赤い　眼から　何かが落ちてくるのがわかった。
「・・・なんだ？」
「・・・。」
「・・・。」
「ーーーー！！」
落ちてきているのが、やっとわかった・・・。
・・・・人、だ。
グシャァァァァーーーー。
「おい！！・・・落ちたぞ。」
「うん・・・落ちたね。」
コトッコトッ
「おい、歩いてきてねーか・・・。」

「うん・・・歩いてきてる・・・。」

ヴィィィィィィィィィィィィィィィンンンン

「何か、持ってねーか・・・。」

「うん・・・持ってる、ってか私もう無理みたいです・・・。」

バタンッッ

「姫香!!」

姫香は、ーーーー倒れた。

「おいおい、俺・・・1人かよ」

＜1人じゃないよ・・・僕もいるよ。＞

「・・・え!?」

隣にいたのは・・・男、チェンソーを持った・・・。

ヴィィィィィィンンン

＜君と僕を合わせて・・・2人だけだね、でも・・・今からーーー僕1人だけになるんだぁぁ＞

「・・・それって、要するに・・・俺を殺すってこと　だよね・・・。」

＜そうゆうことにぃ、なるねーェェェェェ＞

チェンソー持ちの男は俺に向かって、チェンソーを振りかざした・・・。

ヴィィィィンンンン！！

「ーーーー危ねぇ！」

ヒュッと避けたつもりが・・・。

ツルンッッ

「痛ッッ」

・・・こけた。

この危険な状況で・・・こけた。

＜早く、死　ん　で　♪＞

ヴィィィィィィィィィンンンンンン

（死んだな・・・こりゃぁ）

（・・・・・。）

（・・・・・。）

（あれ、まだ俺生きてる・・・？）

恐る恐る、目を明けると・・・。

　　ギィィィィィィィィィィィィン

「ーーー！？」

目の前にいたには・・・、　超絶美男子。

＜誰だぁ貴様ぁぁぁぁ早くそこをどけェェェーーー＞

「断る」

＜あぁぁん？・・・殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す＞

「・・・無理だな」

　　ブシャーーーーーーーーーーッッッ

「・・・。」

＜あれ？なんで、僕の腹に　刀が・・・痛い痛い痛い＞

「お前の・・・　負けだーーー、　化物」

　　グシャァァァァァァァァッッッ

＜あぁぁぁぁぁっっ、うぎゃがぁぁあぁぁぁあああああああぁあぁぁ＞

ビシャァァーーーーーー

「・・・・・。」

「・・・・・。」

「・・・大丈夫かい？」

「あ！おう、平気だ・・・それより志春と姫香が！！」

「あぁ、あの2人は大丈夫だよ」

「・・・え？」

「今は、僕の部屋で寝かせてる・・・明日までには治るはずだ。」

「はぁ～、よかった。」

晶は、心から安堵の息を吹いた・・・。

「あ！それより、あんたは・・・？」

「あ！僕ですか？僕は、　美光裕太（びこうゆうた）、　中学2年生です。」

（はぁ～名前にも　美　と入ってるほど　美男子だな～）

「裕太ね、よろしく」

「あの～、貴方の名前は・・・？」

「あぁ！俺は、斉藤晶（さいとうあきら）、中2だ・・・よろしく。」

「はい、よろしくお願いします」

「夜は、危険だから部屋に戻ったほうがいいですよ」

「・・・危険って」

「・・・　化物のことですよ」

「え！？でも、　化物はおもに昼　活動するんじゃ・・・」

「えぇ、そうですが・・・化物は夜に　獲物を見つけるんですよ」

「ま、まぢか！？じゃ、今日のチェンソー男も昨日の夜に・・・」

「そのようですね・・・。」

「恐ろしいな～」

「おっと、もう部屋に戻りましょう・・・目をつけられます」

「そうだな」

「それでは・・・。」

「おう、また明日」

裕太は、ドアを開け部屋に戻って行った・・・・。

「俺も、早く部屋に戻らねーと・・・・。」

晶はそう独り言を言って、部屋に向かった・・・・。

「いつになったら、戻れるんだ・・・・まぁ帰る場所なんて無いがな・・・・。」

（おやすみ・・・・なさい。）

3日目、死亡者・・・・チェンソー男　出会った仲間　美光裕太（びこうゆうた）　残り　5名

3日目（後書き）

コメントください！
評価頼みます・・・。

４日目で・・・死亡者が・・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0379v/

ーーーー別部屋ーーーー

2011年10月8日21時08分発行